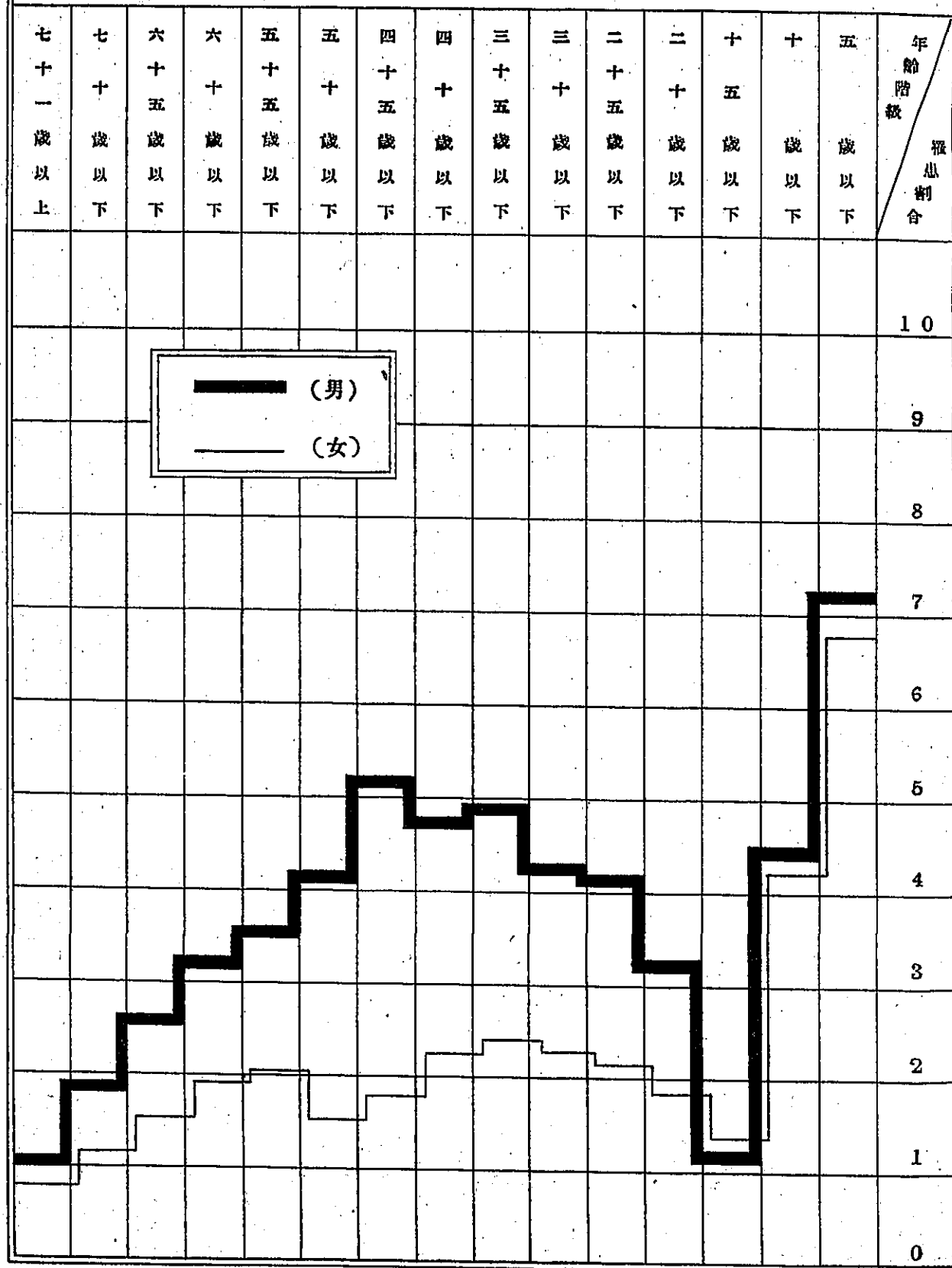


合割患罹者患瘡痘ルス對ニ萬壹口人別級階齡年

(數者患生發年元正大自)  
(年三和昭至)



計	七十一歳以上		七十歳以下		六十五歳以下		六十歳以下		五十五歳以下		五十歳以下		四十五歳以下		四十歳以下		三十五歳以下		三十歳以下		二十五歳以下		二十歳以下		十五歳以下		十歳以下		五歳以下		年齢階級	罹患者割合		
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男				
一七二七	一	一	二	六	一	六	九	六	一	二	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二		
三八・九〇〇	〇・五三	〇・五三	一・〇六	三・一七	五・八二	四・七六	三・一七	六・三五	三・一七	五・二九	一・一一	一・一一	一・〇六	五・八二	一・〇六	五・八二	一・〇六	五・八二	一・〇六	五・八二	一・〇六	五・八二	一・〇六	五・八二	一・〇六	五・八二	一・〇六	五・八二	一・〇六	五・八二	一・〇六	五・八二		
九九七	三	三	九	四	九	二	八	一	六	五	一	六	四	一	六	四	一	六	四	一	六	四	一	六	四	一	六	四	一	六	四	一	六	四
一九二	九	九	一	三	一	三	二	二	三	四	三	四	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
一〇〇〇〇	〇・九〇	〇・九〇	一・三〇	一・三〇	二・三二	二・三二	三・四一	三・四一	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	一・六四	
一〇〇〇〇	四・六九	四・六九	六・七七	六・七七	一一・四六	一一・四六	一七・一七	一七・一七	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四	一〇・九四

至昭大正元年 全國年齡階級別人口一萬二對スル痘瘡患者性別罹患割合



至昭大正元年 全國年齡階級別人口一萬二對スル痘瘡患者性別罹患割合

年齡階級別	總人口ニ對スル千分率		各階級人口一萬對罹患率	
	男	女	男	女
五歲以下	六八・七〇	六九・六五	七・八〇	六・九六
十歲以下	五八・四四	五七・四七	四・三九	四・三二
十五歲以下	五五・七一	五五・六八	一・〇四	一・〇四
二十歲以下	四八・四三	四八・四三	一・七三	二・四六
二十五歲以下	四一・六一	四一・六一	二・〇六	三・一七
三十歲以下	三五・七七	三五・七七	二・一五	三・二六
三十五歲以下	三〇・〇六	三〇・〇六	二・四八	三・五九
四十歲以下	二八・六一	二八・六一	二・〇八	三・四九
四十五歲以下	二七・七四	二七・七四	一・五七	三・三九
五十歲以下	二五・三七	二五・三七	一・五二	二・九一
五十五歲以下	二〇・四九	二〇・四九	一・〇六	二・八一
六十歲以下	一六・四三	一六・四三	〇・七三	二・三九
六十五歲以下	一三・六三	一三・六三	〇・五七	二・〇七
七十歲以下	一〇・六〇	一〇・六〇	〇・五三	一・五一
七十一歲以上	六・八九	六・八九	〇・七六	〇・八六
合計	四九七・五八	五〇二・四二	一・四四	二・〇五











内中 分類	職 業 別 年 次	其 他										無 職 者	合 計	總 計	
		掃 除 夫	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人				
		掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人	掃 除 人				
大正十三年	本人	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
大正十四年	本人	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
昭和元年	本人	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
昭和二年	本人	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
昭和三年	本人	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	本人	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
合計	千對スル 分比	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5

(附) 世界各國殊ニ歐洲諸國ニ於ケル本病流行ノ大勢

(甲) 死亡數ヨリ觀タル十九世紀後半ヨリノ流行概況

内閣統計局ニ所藏セル各統計書ニ就キ、能フ限リノ材料ヲ蒐集シテ別表ノ如ク世界各國ニ於ケル本病死亡者ヲ集計シ之ニ依リ流行ノ大勢ヲ觀察スレバ大要次ノ如シ。

(本表ニハ何レモ一九〇六乃至一〇年ニ至ル五年間ノ集計ヲ缺ク)

一 英國

一八五五年以降ノ本病死亡者ヲ觀察スルニ、一八八五年ニ至ル約三十年間ハ少キハ八百四十五名多キハ二萬五千六百六十九名ヲ算シツツアリシガ、其ノ後ノ二十年間ハ死亡者數頗ニ減少シ、一九〇二年ノ二千五百四十五名ヲ最多トシ、一千名ヲ超エタル年ハ僅ニ三箇年ヲ數フルニ過ギズ、最モ少キハ一年十六名ノ死亡ヲ見タルノミナリ、次デ一九一一年以降ハ死亡者激減シ僅ニ二三名ヲ算スルニ過ギザル年アリ、他國ニ比シ特ニ死亡者ノ少キハ注目ニ値スル所ナリトス。

二 獨逸

一八七二年以降ノ統計ヲ觀察スルニ、此國ニ於テハ左程流行ヲ觀ザル如ク、一八七二年、一八八一及八二年ノ三箇年ニ一千名ヲ超エタルコトアルモ、其ノ他ハ一般ニ少數ニシテ百名以上ニ昇ラザルコト二十五箇年ヲ數フル等、寔ニ種痘強制國ノ狀勢ヲ窺フニ足ルベシ。

三 佛蘭西

一八八九年以降ノ統計ヲ知り得タルノミナルガ十九世紀ニハ多ク一、二千名ノ死亡者アリ、二十世紀ニハ百臺ノ數ニ止マリツツアリテ十九世紀ヨリハ二十世紀ニ一般ニ死亡者ノ減少セルヲ見ルモ近時ノ成績ハ獨、英ニ比シテ不良ナルガ如シ。

#### 四、伊太利

一八八七年以降三年間ハ死亡者一萬ヲ超エタルニ其ノ後漸次減少シ、一九〇〇年ノ如キハ僅ニ三百十六名ヲ算スルニ過ギザリシニ其ノ翌年ヨリ再ビ増加シテ六千名ヲ數フルコトアリ、其ノ後一九一三年ヨリ五箇年間ハ激減ノ状態ニアリシモ、一九一九乃至二〇〇年ハ再ビ一萬以上ノ死亡者アリ、最近ハ亦減少セルモノノ如シ。

#### 五、埃地利

一八七一年以降十九世紀ノ間ハ流行激烈ニシテ死者六萬四千名ヲ超エ歐洲ニ於ケル流行國ノ首位ニアリシガ、二十世紀ニ入りテハ其ノ最多ノ年モ五百七十一名ニシテ少キハ六名ニ過ギザルノ状態ニアリ。

#### 六、其他ノ歐洲諸國

洪牙利、白耳義ハ最近ノ統計ヲ缺キ、丁抹、瑞典、挪威、瑞西、芬蘭、ユーゴスラビヤ各國ハ十九世紀ニ比シ近時非常ニ減少セルヲ見ル、又西班牙ハ最近ノ統計ノミナルモ、死亡者數多キコトハ歐米諸國ニ冠タリ。

#### 七、亞米利加合衆國

一八五五年以降ノ統計ニ依ルニ死亡者數ノ最多ナリシ年ト雖、漸ク一千三百餘名ヲ算シタルノミニシテ、然モ一千名以上ニ出デタルハ僅ニ一箇年ニ過ギズ、其ノ他大流行ノ跡ヲ見ザルモ、近時却テ死亡

者數多少増加ノ傾向ニアリ。

#### 八、英領印度

最近ノ統計ノミナルモ、一九一八年以降ノ數年ハ死亡者極メテ多ク十三萬六千名ヲ算シ、各國ノ流行ガ此國ニ集注シタルガ如キ觀アリ。

### (乙) 最近ノ患死者數ヨリ觀タル流行概況

一九二八年四月伯林ニ於テ開催セル「國際聯盟保健部痘瘡調查委員會」ニ於テ各國委員ガ一九一九年以降一九二七年迄ノ痘瘡患死者數ヲ提出シテ歐洲ニ於ケル痘瘡流行ニ就キ研究討論ヲ爲シタルコトアリ、左表ハ右ノ會議ニ於テ各國委員ノ提出セル數字ニ依リ製表シタルモノナルガ、之ニ依リ最近ノ歐洲各國ニ於ケル本病流行狀況ヲ記述スベシ。

一九一九年ニ於テ最モ多ク患者ヲ出シタルハチエツコスロバキアニシテ患者十一萬ヲ超エタルヲ首位トシ之ニ次ギタルハ伊太利ノ三萬四千三百六十五名、ルーマニアノ二萬五百二十三名、獨逸ノ五千十二名、ポーランドノ一千八百六十四名、フィンランドノ一千七百五十九名等ナリ、然ルニ死亡者ニ於テハ伊太利ノ一萬六千三百八十名ヲ第一位トシ死亡率ノ高キコト他ニ比類ナシ、之ニ次グルハ葡萄牙ノ八千八百六十四名、患者數不明、ルーマニアノ五千八百三十四名、西班牙ノ三千六百二十名、患者數不明、チエツコスロバキアノ千八百八十六名等多數ノ部類ニ屬ス。

然ルニ年次ヲ經ルニ從ヒ、前記患者數ノ多カリシ六國ハ何レモ患者數激減シ、一九二七年ニハ百名以下トナリ、死者十名以内トナレルニ反シ、英、蘭及ツェールスハ一九一九年ニ二百九十四名ナリシ患者ガ一九二七年ニハ一萬四千七百六十七名ヲ算スルニ至レルモ、死者ハ僅ニ四十九名ニ過ギズ、又佛蘭



西ノミハ毎年四五百名ノ患者ヲ數ヘ、流行病勢ニ弛張ヲ見ザルハ他ノ諸國ト全ク趣ヲ異ニセル所ナリ。

以上ノ狀勢ヲ概括シテ云ヘバ歐洲諸國ハ近時患者ノ發生數ハ頓ニ其ノ數ヲ減シ、死亡者ハ尙一層激減セルヲ見ルベク、一般ニ本病ノ病症ガ輕易トナレルヲ認メ得ベシ。

### (丙) 英國ニ於ケル「アラストリム」Alastrimノ流行狀況

既ニ記載セル如ク、英國及ウエールスニ於ケル痘瘡患者ハ最近大ニ其ノ數ヲ増シ一九二三年ヨリ二七年ニ至ル四年間ニ三萬四千五百五十二名ヲ算シタリ、然ルニ之ガ死亡數ハ殊ニ少ク此四年間ニ僅ニ七十五名ヲ數ヘタルニ過ギズ、而シテ病症ハ一般ニ輕易ニシテ、輕易型即チ「アラストリム」ナリト稱セラレ、其ノ症狀ハ眞痘ニ比シ、輕症ニシテ、經過短ク、死亡スルコト稀ナルコト勿論ナリ。

#### 一、類似點

- (1) 前驅疹ヲ生ズルコト
- (2) 澀語等ノ腦症狀ヲ發スルコト
- (3) 丘疹ノ發生分佈ハ同様ナリ且二十四時間内ニ出揃フコト

#### 二、相違點

- (1) 化膿熱ナク假痘ニ似タルコト
- (2) 痘疱ノ經過速カナルコト
- (3) 初發症狀劇甚ナル場合ニモ經過必シモ不良ナラザルコト

### 各國痘瘡死亡者數 (其一)

年	次	日本	暹羅	英吉利	獨逸	佛蘭西	伊太利	奧地利	洪牙利	白耳義	丁	抹	諸	威
安政二	一、八五五			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
同三	一、八五六			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
同四	一、八五七			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
同五	一、八五八			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
同六	一、八五九			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
萬延元	一、八六〇			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
文久元	一、八六一			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
同二	一、八六二			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
同三	一、八六三			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
元治元	一、八六四			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
同二	一、八六五			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
同三	一、八六六			一、〇〇〇						一、〇〇〇				
同三	一、八六七			一、〇〇〇						一、〇〇〇				

等ナリトス、而シテ「本症ト種痘トノ關係」ハ充分之ヲ認メ得ベク、種痘善感後十年以内ハ本症ニ對シ完全ニ免疫ヲ保有スト云フ、現ニ一九二六年ニ十二歳未滿ノ子女ニシテ乳兒時代ニ種痘ヲ受ケタルモノニハ本症ニ罹患セルモノ皆無ナリシニ、反之十二歳以内ノ未種痘兒ニ罹患セルモノ三千九百八十名ヲ數ヘタリ、但シ本症ニ罹患セルモノニシテ滿一箇年後ニ種痘ニ善感セリトノ報告アリ、免疫持續期間ハ極メテ短キガ如キモ再感染シタルモノハナシト云フ。

英國政府ハ本症ト眞痘トガ混合シテ流行セルニ付現今ノ處行政上ニハ全ク眞痘ト同様ノ取扱ヲ爲シツツアリ。

年	次	日	本	耶米利加	英吉利	獨逸	佛蘭西	伊太利	奧地利	洪牙利	白耳義	丁	抹	諾	威
同二十八年	一、八九五														
同二十九年	一、八九六														
同三十年	一、八九七														
同三十一年	一、八九八														
同三十二年	一、八九九														
同三十三年	一、九〇〇														
同三十四年	一、九〇一														
同三十五年	一、九〇二														
同三十六年	一、九〇三														
同三十七年	一、九〇四														
同三十八年	一、九〇五														
同三十九年	一、九〇六														
同四十年	一、九〇七														
同四十一年	一、九〇八														
同四十二年	一、九〇九														
同四十三年	一、九一〇														
同四十四年	一、九一一														
大正元	一、九一二														
同二年	一、九一三														
同三年	一、九一四														
同四年	一、九一五														
同五年	一、九一六														
同六年	一、九一七														
同七年	一、九一八														
同八年	一、九一九														
同九年	一、九二〇														
同十年	一、九二一														
同十一年	一、九二二														
同十二年	一、九二三														
同十三年	一、九二四														

年	次	日	本	耶米利加	英吉利	獨逸	佛蘭西	伊太利	奧地利	洪牙利	白耳義	丁	抹	諾	威
同二十七年	一、八九四														
同二十六年	一、八九三														
同二十五年	一、八九二														
同二十四年	一、八九一														
同二十三年	一、八九〇														
同二十二年	一、八八九														
同二十一年	一、八八八														
同二十年	一、八八七														
同十九年	一、八八六														
同十八年	一、八八五														
同十七年	一、八八四														
同十六年	一、八八三														
同十五年	一、八八二														
同十四年	一、八八一														
同十三年	一、八八〇														
同十二年	一、八七九														
同十一年	一、八七八														
同十年	一、八七七														
同九年	一、八七六														
同八年	一、八七五														
同七年	一、八七四														
同六年	一、八七三														
同五年	一、八七二														
同四年	一、八七一														
同三年	一、八七〇														
同二年	一、八六九														
明治元	一、八六八														





國名	患死別	一九一九年	一九二〇年	一九二一年	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年
諸威	死者	一、八〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇	二、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇	三、〇〇〇
ポーランド	死者	一、〇〇〇	二、〇〇〇	三、〇〇〇	二、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	五、〇〇〇	三、〇〇〇
ホルトガール	死者	八、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇
ルーマニア	死者	五、〇〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇	八、〇〇〇	九、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一一、〇〇〇	一二、〇〇〇	一三、〇〇〇
セルビヤ聯邦	死者	九、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一一、〇〇〇	一二、〇〇〇	一三、〇〇〇	一四、〇〇〇	一五、〇〇〇	一六、〇〇〇	一七、〇〇〇
蘇蘭	死者	一〇、〇〇〇	一一、〇〇〇	一二、〇〇〇	一三、〇〇〇	一四、〇〇〇	一五、〇〇〇	一六、〇〇〇	一七、〇〇〇	一八、〇〇〇
スベイン	死者	三、〇〇〇	四、〇〇〇	五、〇〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇	八、〇〇〇	九、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一一、〇〇〇
スエーデン	死者	二、〇〇〇	三、〇〇〇	四、〇〇〇	五、〇〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇	八、〇〇〇	九、〇〇〇	一〇、〇〇〇
瑞西	死者	一、〇〇〇	二、〇〇〇	三、〇〇〇	四、〇〇〇	五、〇〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇	八、〇〇〇	九、〇〇〇
ソヴィエツト聯邦	死者	一、〇〇〇	二、〇〇〇	三、〇〇〇	四、〇〇〇	五、〇〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇	八、〇〇〇	九、〇〇〇
其他ノ歐洲諸國	死者	一、〇〇〇	二、〇〇〇	三、〇〇〇	四、〇〇〇	五、〇〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇	八、〇〇〇	九、〇〇〇

### 第五章 原因

痘瘡ノ原因ハ生活體ニシテ主トシテ人體ヲ侵シ本病ヲ惹起スルモノナルコトハ確實ナルモ其ノ本體ニ就テハ何物ナルカ未ダ全ク不明ニ屬スト雖モ極メテ微小ニシテ濾過性ノモノナルコトハ疑ヲ容レズ、本病ノ病原ニ就キ細菌説ヲ唱ヘタルモノアルモ、其ノ後ノ研究ニ依リ細菌ニアラザルコトハ明カトナリタリ、又連鎖狀球菌等ノ如キ化膿菌ナリト主張セシモノアルモ、是亦二次的感染ノ細菌ニ過ギザルコトヲ認

メラレタリ、其ノ他原蟲説ヲ主唱スルモノアリ、就中グアルニエリー(Guarnieri)氏小體ハ興味多キモノニ屬ス、即チ痘瘡患者ノ痘疱ヲ家兎角膜ニ接種スルトキハ毎常此ノ小體ヲ證明スルコトヲ得、依之水痘ノ鑑別診斷ニ用ヒラル、等極メテ重要ナルモノナルモ、之ガ果シテ眞ノ病原體ナルヤニ就テハ尙幾多ノ反對説アリ、其ノ本體ニ關シ現今多ク信ゼラルル所ニ依レバ、病原體ニヨル反應生産物ナリト認メラレ、今後ノ研究ヲ要スルモノナルベシ、尙本病ノ病原ニ就テハ後章「痘瘡病原論」ニ於テ詳述スル所アルベシ。

### 第六章 傳染徑路

#### 一、觸接感染

「痘瘡感染ノ源ハ人ナリ」トハ既ニ先人ノ言ヘル所ニシテ、本病ノ感染ハ患者ノ發疹ノ内容ニ接觸スルコトニ依リテ最モ多ク行ハル、而シテ發疹ノ内容ハ瀾濁シ始ムルトキ、即チ水痘期ヨリ化膿期ニ移行スル際ニ最モ強キ感染力ヲ有スルモノナリト考ヘラル。本病ノ感染ガ觸接ニ依リテ行ハルルコトハ、毎常ノ流行ニ於テ家族傳染、看護、交通等ニヨル傳染ノ尠カラザルヲ經驗スルコトニ依リテ承認シ得ベク、又化膿期ニ移行スルトキニ傳染力更ニ烈シキコトハ、往時痘疱内容ヲ人ニ接種シテ所謂「ワリオラチン」(傳痘術)ヲ行ヒシ事實ニ依リテモ之ヲ知ルコトヲ得ベシ、然シ乍ラ水痘期ニ於テ痘疱内容ノ漿液性ナルトキモ感染力ヲ有シ、痂皮モ亦感染力ヲ有スルノミナラズ、病毒ガ速ク空氣中ニ飛散シテ患者ノ四圍ヲ脅スコトハ却テ此期ニ甚シキモノノ如シ。

#### 二、物品媒介

本病毒ハ直接人ヨリ人ニ傳フルノミナラズ、種々ナル物件ヲ介シテ間接ニ傳播スルコトアリ、物品中危険ナルハ衣類、寝具、古綿襪等其ノ主ナルモノナリ。

- (1) 衣類ニ依リテ病毒ノ傳播スルコトハ、往古一種ノ種痘法トシテ、患者ノ用ヒタル衣服(病毒ノ附着セルモノ)ヲ愛兒ニ着用セシメ、輕キ痘瘡ニ罹ラシメテ、病後免疫ヲ得セシメント試ミタリシ事實(衣苗法)ニ鑑ミルモ明カナリ。
- (2) 衣類、毛布、襪、古綿等ノ物品ニ依リ、病毒ヲ遠隔ノ地ニ運ビ流行ヲ來シタル實例ハ既ニ第一編第六章傳染徑路ニ於テ詳述セルガ如シ。

### 三、空氣傳染

- 痘瘡病原ガ空氣ニ依リテ相當遠隔ノ所ニ飛散スルコトハ、夙ニ唱ヘラレタル所ナルガ、之ニ關スル文献一、二ヲ記載センニ
  - (1) ビーデンカンフ(Bidenkamp)及クラウマン(Kaumann)氏ハ痘瘡病原體ガ風ニ依リテ六哩ノ遠距離迄擴ゲラレタリト報告シ、
  - (2) ワウリンスキー(Wawrinsky)氏ノ如キハ百七十哩ノ遠キニ達セリト云ヒ、
  - (3) ボイムラ(Baumler)氏ハ次ノ事實ヲ報告セリ、即チ先年倫敦ニ於テ、住宅地ノ中ニ建テラレタル痘瘡病院ニ嚴格ナル隔離ノ勵行ヲ爲シタルニモ拘ラズ、其ノ周圍ニ頗ル多數ノ患者ヲ續發シ、其ノ結果患者ノ隔離所ハテムス河下流ノ船内ニ設ケラルルコトナリタリ、然ルニ一八九二年乃至九五年ノ流行ニ際シ、右隔離船ノ風下ニアル或ル部落ニ多數ノ患者ヲ發生シタルコトアリ、スレッツシユ(Threat)氏ハ此事ニ非常ナル注意ヲ拂ヒ調査シタル結果、隔離所ノ病毒ハ氣流ニ依リ二英里即チ三二、三キロメートル擴ガリシコトヲ信ジタリト云フ。
- 予等ノ經驗ニ依ルニ、東京市駒込病院、北豐島郡豐島病院等ニ痘瘡患者ヲ收容スルトキハ、其ノ周圍ノ民家ニ同病患者ヲ發生スルコトハ殆ド毎常ノ流行ニ於テ見ル所ニシテ、昭和三年春ノ流行ニ際シテモ同

様ノ事實ヲ認メタルコトハ後章第五編第一章第二節詳述スルガ如シ。

要之、痘瘡ノ病毒ハ他ノ傳染病ノ如ク患者ニ接觸スルコト、又ハ物品ヲ媒介スルノ他、遠ク空氣ニ依リテ傳播スルコトハ防疫上特ニ注意ヲ要スルコトニ屬ス。

## 第七章 病理解剖

### 第一節 發疹ノ組織學的所見

此場合注意ヲ要スルハ特異性ノ病原體ニヨリ惹起シタル變化ト、第二次的病變トヲ嚴ニ區別スベキ事ナリ。

特異性變化ト看做スベキハ上皮深層ニ於ケル凝固性壞死(Koagulationsnekrose Waigerts)空胞性變性及網狀性液化(Balloierende Degeneration u. die retikulierende Kolliquation Unns)等ナリ、病原體ハ血行ヲ經テ皮膚ニ達スルモノナルヲ以テ最初ニ侵サルルモノハ上皮基底膜部及之ニ近接スル基底細胞層ナリトス、サレド之ニ先チ明ニ中毒作用ヲ認ムルモノニシテ真皮乳頭部ハ浮腫ヲ呈シ、次デ其ノ尖端壞死ニ陥ルモノアリ、而シテ此部ニ於ケル擴張セル毛細血管内外ニハ變性セル白血球多シ、即チ其ノ原形質ハ構造ヲ失ヒ、核ハ分碎セラレテ菊花様形狀ヲ呈シ、其ノ他無數ノ球形、橢圓形ノ小體ニテ核染色法ニ濃染スルモノヲ認ム、是レ恐ラク死滅セル白血球及血管内皮細胞ヨリ由來セルモノナル可シ、又該部ニ於ケル組織液ノ移動ト共ニ是等ノ崩壞セル小體ハ壞死ニ陥レル上皮基底膜ヲ通過シ基底細胞間ニ送致セラレ、基底細胞モ亦中毒作用ノ爲メ一部分壞死ニ陥リ圓形ノ重層球トナルモノアリ、又上皮ノ分裂層(胚種層)ノ中帶部ニアル細胞ハ相互ニ方



網狀ニ分散シテ次デ液化スル定型の病變ヲ示スモノナリ、發病初期ノモノニアリテハ該上皮細胞中ニ小  
 細胞ヲ認ルモ漸次多數トナリ、且ツ其ノ大ヲ増シテ相融合ス、夫ガ爲メ細胞間ノ棘狀像ハ不明トナリ、其ノ  
 細胞内ニ液體ノ滯溜ノ爲メ細胞ハ長サヲ増シ所謂櫛狀像ヲ呈スルモノアリ、又細胞膜ハ壞死ニ陥リテ纖  
 維素染色法ニ好染スルモノ或ハ液體ガ胞體內ニ甚シク滯溜シ途ニハ細胞膜ハ破レテ隣接セルモノ相通  
 ズルニ至ル、斯クシテ漸次液體ヲ充セル空間ハ増大シテ途ニハ網様組織ヲ藏スル痘瘡ヲ形成ス。  
 上皮細胞ノ空胞性變性ハ主トシテ痘疹ノ下層ニ現ハレ、先ヅ細胞核ノ周圍ニ空胞ヲ生ジ、次第ニ増大シテ  
 終ニ原形質ハ薄層ヲ形成スルニ至ル、斯クシテ上皮細胞ハ膨大シ、圓形ヲ呈スルニ至リ、細胞間ノ棘狀質ハ  
 消失ス、細胞ハ氣球ノ集團ノ如ク群團ヲ爲シ、其ノ原形質ハ構造ヲ失ヒ、纖維素染色反應ヲ呈ス、核ハ膨大シ  
 決裂シテ或ハ崩壞シ時ニハ二〇乃至三〇個ニ分裂スルコトアリ。

上記ノ被害基底細胞ハ特異ノ塊狀崩壞ヲ呈ス、即チ球狀トナリ、棘狀層ノ消失ニ基キ互ニ密着シ、或ハ數個  
 一團ヲナス、核膜ハ殘存スルモ膨大セル核内ニハ屢楕圓形或ハ圓形ノ物質ヲ認メ、其ノ構造ハ網狀ヲ呈ス  
 是レカウンシルマン Couchman 氏等ノ所謂核内寄生體ト稱スルモノニ一致ス、サレドヨツホマン Jochmann 氏  
 ノ見解ニ依レバ是レ病毒ノ爲ニ變性セル核小體ニ外ナラズ、薄キ組織切片ヲ用ヒ強光ノ下ニ檢スレバ細  
 胞原形質内ニ辛ウジテ認メ得ル小點アリ、是レ膿疱塗抹標本ニ見ル原小體 Elementarkörperchen ト同一  
 物ナルベシ、塗抹標本ニテハ此外網狀崩壞及球狀變性ヲ呈セル細胞ヲモ認ム、サレド切片内ニテハ細胞境  
 界不明ノコト多シ、細胞内ハ纖維素ヨリ成レル微細ナル網狀構造ヲ呈シ無數ノ原小體ヲ藏ス。  
 痘疹ノ中央部ニ變性初マルト同時ニ其ノ周邊部ニハ上皮細胞ノ増殖ヲ見ル、即チ乳狀突起ハ強度ノ上皮  
 増殖ノ爲ニ延長シ、之ニ接スル棘狀層ハ著シク肥厚シ且ツ水腫樣トナル、斯クシテ中心部ヲ圍ミテ上皮細  
 胞ヨリ成ル壁ヲ形成シ痘疹ノ隆起及中心部ノ陷凹ヲ招來ス、即チ中央部ハ周邊部ノ腫脹ト同一歩調ヲ取

リ得ザル爲メ臍狀部ヲ形成スルナリ、其ノ他ノ諸變化ハ何レモ續發性現象ニ過ギズ、而シテ壞死ニ陥レル  
 組織ハ異物トナリ白血球ノ集合ヲ促シ、當初透明ニシテ僅少ノ凝固纖維素及少數ノ白血球ノミヲ含有セ  
 シ淋巴液ハ潤滑シ膿狀ヲ爲スニ至ル、痘疹愈々熟スルニ及ビ白血球ハ愈々増加シ時トシテ網狀構造ヲ破  
 フニ至ル、膿汁ノ増加ト共ニ膿疱ノ臍ハ消失ス、是レ臍部ヲ基底部分ト結合スル索狀ノ部分ガ壓力増加及化  
 膿ノ爲斷切セララルルニヨル爲ナリ、其ノ後乾燥期ニ入レバ臍ハ再ビ形成セララル、是レ中央部ハ液ノ蒸發ト  
 共ニ陷落スルモ周邊部ハ上皮増殖ノ爲隆起去ラザレバナリ、(乾燥臍、眞皮部ニハ血管ノ周圍ニ「ブラスマ」細  
 胞ノ集マルヲ見ル。

治癒機轉ハ下記ノ如シ、即チ膿疱内容ハ次第ニ乾燥シ從テ膿胞ハ痂皮トナル、此乾燥ガ終ル前、既ニ新生上  
 皮細胞ハ菲薄ナガラ増殖シテ周邊部ヨリ中心ニ向テ進行シ痂皮下ニ潛入ス、從テ痂皮ハ舊上皮ト新生上  
 皮トノ間ニ包マレ「カプセル」ヲ以テ蔽ハレタル如キ狀態トナル、此狀態ハ特ニ手足ノ背部ニ著明ナリ、是等  
 ノ部ニテハ舊上皮ハ強硬ニシテ爲ニ之ニ蔽ハルル痂皮ハ「レンズ」形ヲ呈ス、痂皮ノ壓ノ爲ニ其ノ下ノ乳狀  
 突起ハ扁平トナル、(膿疱ノ時代ニ亦壓ノ爲同様に影響ヲ蒙ルハ明カナリ)其ノ結果痂皮脫落後稍、陷凹セル  
 癩痕ヲ形成ス。  
 出血性痘疹ニ見ル出血性發疹ニ在リテハ上記ノ所見ト血液含量ニ差アルノミ、出血性痘瘡以外ノ部ニモ  
 散在スル皮膚出血ハ赤血球ガ血管外ニ滲出スルニ基クモノナリ。

第二節 剖檢所見

(1) 上氣道粘膜

特異ノ發疹及腫、上皮剝離竝潰瘍ヲ認ム、此潰瘍ハ膿疱ノ上皮部ノ缺潰ニヨリテ生ズ、斯ノ如キ潰瘍ノ多

數ガ相融合シテ廣汎ナル上皮缺損ヲ來スコトアルハ、口腔及舌粘膜ニ認めラルル處ナリ、同一變化ハ亦扁桃腺、軟口蓋、鼻咽腔等ニモ起ルコトアリ、更ニ進ミテ喉頭ニ達シ更ニ氣管支ニ進ミテ第二及第三次氣管支ニモ及ブコトアリ、氣管分岐部ノ粘膜ハ、屢、粘膜缺損ノ大ナルモノヲ生ズ、細氣管支ニテハ通常痘疹ナク唯多少加答兒性炎症ヲ呈スルノミ、特ニ惡性ノ融合性痘疹及出血性痘疹ノモノニアリテハ扁桃腺及軟口蓋粘膜上ニ壞死性病變ヲ認め、時ニハ喉頭ニ迄及ブ、壞死ガ粘膜深層ニ漸進スル爲ニ粘膜缺損部ハ泥狀汚穢褐色ヲ呈スル者ヲ以テ蔽ハル。

(2) 肺 臟

上述ノ氣管支炎ニ關聯シテ屢、氣管支肺炎ヲ來ス、殊ニ下葉ニ此變化稀ナラズ、此際關係アル菌ハ連鎖狀球菌、葡萄狀球菌、インフルエンザ菌等ナリ、又屢、或ハ漿液性或ハ化膿性肋膜炎ヲ見ル、合併症トシテ格魯布性肺炎ヲ見ルコトハ頻繁ナラズ、肺膿瘍ハ敗血性重症患者ニ時々認めラレ、パーキンス Perkins 及、カウンスルマン P. Cunniffman 氏ノ如キハ何レモ是等混合感染ノ場合ニ連鎖狀球菌ノ侵入スル門戸ハ氣管支粘膜ナリト信シ居レリ、細胞内小體、グアルニエリー氏小體ノ如キハ皮膚及粘膜ノ特異性病變部ニ見ラルルノミニシテ他ニハ發見サレズ。

(3) 消化器系統

特異性變化ト見ルベキモノ殆ドナシ、食道ニハ其ノ上部ニ當リ膿疱性發疹ヲ見ルコトアリ、胃部ニハ此コトナシ、然レドモ、ベンダ Banda 氏ハ出血性痘疹ノ潰瘍ト見ルベキモノアリシ一例ヲ報告セリ、腸ニハ特ニ病變ナシ、サレド直腸ノ最下部ニハ時々痘疹ヲ認めルコトアリ、胃腸ニハ加答兒性炎症ヲ認めル場合アルモ出血性痘疹ニテハ特ニ胃、空腸、結腸等ニ出血竈ヲ見ルコトアリ、サレド廻腸ニハ此病變殆ドナシ、腸管潰瘍及腸間膜腺ノ腫脹ハ時ニ認めララル。

(4) 心 臟

化膿期ニ死亡セル例ニテハ通常筋層軟弱ニシテ脂肪變性ノ徵ヲ示ス、内膜ニ變狀ヲ呈スルハ敗血症ノ場合ニ限り炎症症狀ヲ呈ス。

(5) 肝臟及腎臟

溷濁性腫脹及脂肪變性ノ徵ヲ呈ス、從テ肝臟ハ稍増大シ、軟ニシテ其ノ切面ハ小葉像不明ナリ、發病早期ニ合併症ナクシテ死亡セル例ニアリテハ肝臟ハ全ク健常ナルコトアリ、脂肪變性ノ強度ナル場合ニハ時ニ燐中毒ニ於ケル如キ所見ヲ呈スル場合アリ。

(6) 脾 臟

發病初期ニテ死亡セルモノニアリテハ強度ニ腫脹ス、被膜ハ緊張シ光澤アリ、實質ハ軟ニシテ褐色ヲ呈ス、發病後時ヲ經テ死亡セルモノニテハ再ビ常態ニ復セルヲ見ル。

**〔痘瘡性紫斑病〕**ニアリテハ實質變化ハ通常見ラレズ、ボンフェイスク Ponfick、エルジー Golgi、クルシエマン Cur-Schmann 諸氏心筋ハ硬度ヲ増シ褐色ヲ呈シ、構造明瞭ニシテ弛緩セズ、肝臟ハ大サ通常ニシテ暗色ヲ呈シ、硬度強ク小葉像明瞭ナリ、脾臟ハ小、硬ク、暗赤色ニシテ光澤アリ、切面ヲ見ルニ濾胞増大セルヲ認め、腎臟ニモ實質變性ノ徵ナシ、是等ノ所見ハ亦眞痘ト紫斑性痘疹トノ臨床所見ニ差異アルコトヲ首肯セシムルモノナリ、後者ハ早期ニ死亡スルモ前者ハ特ニ化膿期以後ニ臟器ノ實質變性ヲ見ルヲ以テ諸變化ハ恐ラク特異性障礙ノ持續的ニ作用スルト共ニ化膿菌毒素作用モ影響アルモノト考ヘラル。

痘瘡病原體ノ特異的作用トシテ、ツイゲルト Weigert 氏ハ肝臟、脾臟、腎臟及淋巴腺ニ認めラルル小壞死竈ヲ舉グタリ、是等ノ變化ハ特ニ痘瘡初期ニ認めラルルモノナリ。

同様ノ限局性小壞死竈ハ骨髓ニモ認めラレ、キヤリー Chiari 及フレンケル Frankel 氏、キヤリー Chiari 氏ハ痘

瘡患者ノ七七%ニ此變化ヲ見、痘瘡性骨髓炎 (Osteomyelitis variolosa) ト名ケタリ、此變化ハ發疹期ニ現レ、經過後久シク殘ル、肉眼的ニハ器粟質乃至半豌豆大ノ壞死竈ニシテ灰白色又ハ帶黃灰白色ヲ呈シ、屢赤色層ニ包圍サル、壞死ハ中心部ヨリ漸次周圍ニ及ブモノノ如シ、而シテ化膿ニ移行スルコトナシ、キヤリー氏ハ本變化ハ痘毒ノ特異性作用ニヨリテ惹起セララルモノト解シ、其ノ發現ノ頻度、早期ニ發現スルコト、皮膚發疹ニ見ラルル變化ト酷似スルコト等ヲ其ノ根據ト爲セリ、グ氏小體ハ此部ニ發見セララルコトナシト(カウンスマン Councilman氏)。

痘瘡初期ニ訴ヘラルル薦骨部及四肢ノ疼痛亦此所見ト關係アルモノナルヤモ測リ知ルベカラズ。此變化ニ酷似スル散發性小竈ハ痘瘡死者ノ舉丸内ニモ見ラル、ベラウ Bérand トルーソウ Troussau 氏モ痘瘡時ニ際シ舉丸ノ侵サルルコトヲ報ジタリ、キヤリー氏ハ精細ナル研究ニヨリ痘瘡死者ニハ痘瘡性舉丸炎ノ甚ダ多キヲ認メタリ、要スルニ此變化モ小壞死竈ニシテ發病早期ニ現ハレ、化膿期ニ至リテ最高度ニ達スルモノニシテ、治癒ニ際シテハ小癍痕ヲ殘ス、細胞内小體ハ舉丸ニハ認メラズ。出血性痘瘡ニアリテハ上記ノ諸變化ノ他ニ多數臟器ニ大小種々ノ出血竈ヲ伴フ、漿液膜ニハ皮膚ニ於ケルト同様出血點、溢血斑等トシテ出現ス、續テ血性滲出物ヲ認ムルハ肋膜腔、心臓内等ナリ、腹膜ノ侵サルルコトハ稀ナリ、出血ハ漿液膜ニ於ケルヨリモ前後縱隔膜及腹膜後結締織ニ著シ、小骨盤内結締織、腎臟被膜等ニモ通常強度ノ出血ヲ認ム、此種ノ痘瘡ニ在リテ特ニ腰痛激甚ナルハ此病變ニ歸シ得ベシ、關節ニモ時時出血アリ、關節滑膜ノミナラズ關節腔内ニ出血スルコトアルハ腰、膝關節等ニ見ラルル處ナリ、隨意筋等ニモ出血ヲ見ル、腎臟實質内ニハ通常出血ナシ、サレド腎盂、輸尿管等ニハ每常出血アリ、肝臟脾臟及神經中樞ニ出血ヲ呈スルコトハ極メテ稀ナリ、肺ニハ時々出血性栓塞ヲ見ル。泌尿生殖器系統ハ出血性體質ニ多大ノ關係アリテ子宮及輸卵管粘膜ノ出血ハ頻繁ナリ、卵巢グラープ氏

胞内ニモ時々出血ヲ來ス、舉丸實質内ニ出血ヲ認ムル場合ハ稀ナリ、特ニ出血強度ナルハ骨髓ナリ、此際骨髓ハ暗赤色、米粥狀ノ軟度トナル、鏡檢スルニ赤血球ノ異常増殖、骨髓細胞ノ減少アリ。敗血症ヲ併發セル場合ニハ更ニ變化ヲ加フルモ是レ一般敗血症ニ於ケルモノニ異ナラズ。

## 第八章 症 狀

### 第一節 潜伏期

潜伏期ハ病毒ニ感染ノ日ヨリ起算シテ、約二週日トスルノ説多シ、予ハ幾多ノ經驗ニ徴シ、十二日ヲ最多トシ、時ニ十日乃至十三日ナルコトヲ信ズルモノナリ。

#### 【潜伏期ヲ推定シ得ヘキ事例】

#### 第一例

増取尙存(二十六年)ハ醫師ノ業ニアリ、大正七年三月十八日見學ノ爲駒込病院ニ到リ痘瘡患者ヲ診察セルガ、三十日ヨリ熱發、身體英和ヲ以テ發病シ、四月一日日本病ト決定ス。

#### 第二例

古谷ヨシエ(二十一年十箇月ノ未種痘兒)ハ大正八年十二月十五日母ト共ニ當時痘瘡ノ流行セル大阪市ニ赴キ、十二月二十七日歸京シ、濱京ト同時ニ發病シ、翌大正九年一月六日附添看護中ノ父渡邊良平(三十六年)ニ感染シ、兩名共一月十日日本病ト決定シ、駒込病院ニ收容セラレタリ。

#### 第三例

島田アキ三十七年ハ大正九年二月二十八日及二十九日ノ兩度、胸込病院入院中ノ痘瘡患者思田信義ヲ見舞ヒタルガ、三月十日ヨリ發熱シ、十八日本病ト決定セリ。

第四例

千田繁藏(二十七年)ハ東京市外澁橋町柏木河平吳服店ノ店員ナルガ、大正十三年一月六日豊多摩病院ニ痘瘡患者ヲ收容シタルニ、同病院ハ腐朽甚シキヲ以テ、同院ニ於テハ病毒ノ四散セムコトヲ恐レ、病室ニ「カーテン」ヲ張ルコトトシ、前記吳服店ニ注文シタルヲ以テ、同患者ハ翌七日同院ニ到リテ見積ヲ爲シタリシガ、翌十九日ニ至リ發病二十二日痘瘡ト決定シタルモノナリ。

第五例

小川宗七(五十五年)ハ神視廳衛生技手ニシテ、昭和三年三月九日種痘ヲ受ケタルガ不感ニ了リタリ、次テ四月八日深川區千田町本間榮藏方ニ發生セル一家四名ノ痘瘡患者ノ檢診ニ從事シタルガ十七日ニ至リ不快感ヲ訴ヘ二十日假痘ト決定シタルモノナリ。

以上五例六名ニ付、潜伏期ヲ考察スルニ、増頭尙存ハ十三日、古谷ヨシエハ十三日以内、渡邊良平ハ十一日、島田アキハ十一日若ハ十二日、千田繁藏ハ十三日、小川宗七ハ十日ナリ、由是觀之、本病ノ潜伏期ハ十日乃至十三日ナルヘシト思惟セラル。

第二節 症 狀

(甲) 【眞 痘】

一、前 驅 期

(1) 初發症狀

發病ハ本病固有ノ初發症狀タル戰慄、發熱、頭痛、竝激シキ腰痛ヲ以テ始マルコト多シ、即チ患者ハ卒然戰慄ヲ來シテ體溫急ニ上昇シ、四十度乃至四十一度ニ及ビ脈搏百二十至ヲ算ス、然モ此期ニ於テ特ニ注意

(2) 一般症狀

スベキ症狀ハ「腰痛」ニシテ其ノ劇甚ナルコト他ノ急性傳染病ニ殆ト其ノ類例ヲ見ザル所ナリトス。概シテ重症ニシテ高熱ヲ持續シ、舌ハ乾燥シ、食思不振、嘔吐ヲ來ス、便通ハ秘結スルコト多キモ稀ニハ下痢ヲ見ルコトアリ、更ニ進ンデハ顔面浮腫狀ヲ呈シ、結膜ハ充血シ、意識ハ瀾濁シ、不眠、譫語ヲ發ス、又輕度ノ氣管支加答兒ヲ呈スルコトアリ、脾臟肥大ハ多ク重症例ニ之ヲ認ム、尿中ニハ蛋白ヲ證明シ、女子ニアリテハ時ニ子宮出血ヲ來ス。

(3) 前驅疹(痘瘡性蓄薇疹)又ハ痘瘡性紅斑

第一、二病日ノ頃、上膊、ジモン氏三角、腋窩、下腹部ニ發現シ(種痘部ノ周圍ニ殊ニ甚シト云フ)形態種々アルモ、大凡(イ)麻疹様發疹(ト稱シ)鮮紅色ノ斑點ヲナスモノ(ロ)猩紅熱様發疹(ト稱シ)融合セル紅色疹ナルモノ(ハ)點狀出血様發疹(ト稱シ)紅斑ニ出血ヲ伴ヘルモノノ三種ニ區別スルコトヲ得ベシ、是等前驅疹ハ必ズ種痘シタルモノニ來リ、發現陽性ナル程概シテ豫後良ナルモノノ如ク、其ノ本體ハ一種ノ「アルレルギー」ナリトノ説アリ(豊田氏)多クハ一、二日ニシテ消退スルヲ常トスルモ出血性ノモノハ殘存スルコト多シ。

一、發 痘 期

(1) 丘疹期

第四病日ヨリ始マルヲ常トス。發痘ハ顔面及被髮部ニ始マリ、次デ軀幹、四肢ニ及ブモノニシテ、始メ針頭大乃至粟粒大圓錐形ノ小紅疹ヲ生ジ、周圍ニハ充血性紅暈ヲ繞ラス、而シテ新シキ發疹ハ既ニ發生セル疹ノ間ニ續出シテ漸次稠密トナリ、多クハ二十四時間内ニ終結ス、熱ハ皮膚疹ノ發生ト共ニ卒然下降ス、斯ノ如ク發痘ノ出現ニ反シ熱ノ

下降スルガ如キハ正ニ本病ノ特徴ト稱スルコトヲ得ベシ。

〔發疹部位〕

口腔内ニハ前驅期ノ終ニ於テ硬軟口蓋咽頭扁桃腺舌頰及口唇粘膜ニ小紅疹ヲ認ムベシ重症ニアリテハ氣道食道ニ發疹スルコトアリ其ノ他ノ粘膜ニハ發疹少ク且遅ル但シ外聽道粘膜及鼓膜ニハ發現スルコト稀ナリ從テ殆ト聽力障礙ヲ來スコトナシ又眼ニアリテハマイボーム腺ニ一致シテ眼瞼縁ニ來リ眼瞼結膜眼球結膜ニハ概シテ少シ。

皮膚疹ハ全身到ル處ニ發スルヲ常トスルモ末梢部ヲ侵スコト多キニ依リ頭部顔面手足等ニ著明ニシテ軀幹ニハ最モ少シ殊ニ手掌足趾ニ必發スルコトハ本病特異ノ症狀ニシテ鑑別上最モ重要ナリ。

(2) 水疱期

前記ノ發疹ハ間モナク水疱ニ變ズ疱ハ大サ豌豆大ニシテ内ニ漿液ヲ貯ヘ頂點ニ凹窩ヲ作ル之ヲ「痘臍」ト稱ス此水疱期ハ約三日間ニシテ次ノ膿疱期ニ移行スベシ。

(3) 膿疱期

痘ノ化膿ハ第九病日ヨリ始マリ第十一病日ニ於テ極期ニ達ス即チ水疱ハ悉ク膿疱ニ變ジ膿疱ノ密生セル部位殊ニ顔面頭部手足等ニアリテハ皮膚及皮下組織ニ炎症性腫脹ヲ生ズルヲ以テ眼瞼ハ閉鎖シ口唇ハ腫脹シ膿汁外聽道ヲ塞ギ痂皮鼻道ヲ閉ヂテ容貌全ク變化ス手足ハ重ク垂レ手掌足趾ハ緊眼シテ扁平トナリ疼痛ヲ訴フ。

三、恢復期

第十二病日化膿熱ノ減退スルトキヨリ始マル。

膿疱ノ内容ハ濃厚トナリテ頂點陷沒シ第二次痘臍ヲ作ル次デ褐色ノ痂皮ヲ結ビ紅暈去リ浮腫減退シ顔面ノ輪廓亦漸次平常ニ復スベシ痂皮ハ日ヲ追フニ從テ乾燥シ大多數ノ痘疱ハ第十六病日ニ至リテ痂皮ヲ完成シテ落屑ヲ始メ四五週ノ後ニハ全ク之ヲ了ル結痂落屑ニ際シ患者甚シク搔痒ヲ訴フルコト多シ落屑ヲ了シタル皮膚ハ暗紅色豌豆大ノ色素斑ヲ貽スモ數月ヲ經レバ漸次消失シ時ニハ永ク白キ痘痕ヲ留ム殊ニ顔面ニ於テ然リトス。

〔融合性痘瘡〕

眞痘ノ内痘瘡密生シ症狀重篤ナルモノナリ。

(1) 前驅症

本症ハ極メテ劇烈ナル前驅症ヲ存スルヲ常トシ熱ハ發疹ノ際ニモ下降セズシテ稽留シ譫語無感覺昏睡等ノ症狀ヲ來スコトアリ。

(2) 皮 疹

夥シク發生シ水疱期又ハ膿疱期ニ於テ相融合シテ皮膚ノ表面ニ硬結ヲ呈スベシ膿疱ハ共通ノ大ナル痂皮ニ彼ハレ膿汁其ノ下ニ淋漓シテ廣ク膿蓋ヲ擡起スベシ。

(3) 粘膜疹

口腔咽頭舌ニ於ケル發疹モ亦多ク氣管支加答兒ヲ合併シ聲音嘶啞呼吸及嚥下困難アリ往々制止シ難キ嘔吐アリ。

(4) 全身症狀

化膿期ニハ高熱稽留シ昏睡ニ陥リ譫語ヲ發シ心臟麻痺ニ依リ致死ス。



(5) 後胎症

幸ニ治癒スルモ喉頭狹窄、失明、關節強直等ヲ貽ス。

(乙) 【假痘】

(1) 假痘ノ本體

所謂「假痘瘡」ニシテ眞痘ト其ノ本體ヲ同ウスルコトハ、假痘ニ近接シテ眞痘ニ罹リ、又之ニ反シテ眞痘患者ヨリ病毒ニ感染シテ假痘ノ症狀ヲ呈スルモノアルヲ以テ之ヲ知ルベシ、蓋シ本病ハ病原體ノ毒力ノ強弱ヨリモ寧ロ患者ノ體質如何ニ依ルモノニシテ、殊ニ種痘ヲ受ケタルモノニ多ク來リ、未種痘者ニ來ルコトハ殆ド稀ナリ。

(2) 皮疹ノ狀況

皮疹ハ少數ニシテ時ニハ全身僅ニ三四十個ニ過ギザルコトアリ、形狀亦固有ナラズシテ僅ニ疣狀ニ隆起シ頂點ニ微小ノ水疱ヲ點ズルニ過ギザルモノアリ、又水疱ヲ呈シテ化膿セズ其ノ儘結痂スルモノアリ、或ハ膿疱ヲ形成スルコトアルモ、其ノ化膿ハ皮膚ノ深層ニ及バズ、從テ癢痕ヲ貽サザルコト多シ。

(3) 全身症狀

總テ輕微ニシテ熱ハ發病當初昇騰シ、第四病日發痘ト共ニ解熱シテ其ノ儘再ビ上昇セザルガ、縱令化膿熱ヲ呈スルコトアルモ、一、二日ニシテ下降スルコト多シ、患者多クハ苦痛ヲ訴フルコト少ク、發疹部ニ於ケル搔痒、熱灼ト飲食ノ際口内ニ於テ多少ノ疼痛ヲ感ズルノミ、最モ輕キモノニアリテハ全ク就褥セザルコトアルヲ見ル。

〔痘瘡ノ特有症狀〕

- 一、特異ノ熱型ヲ有スルコト、即チ第一病日體溫急ニ上昇シ、第四病日發痘スレバ解熱シ、第九病日痘瘡化膿ト共ニ再ビ上昇シ、第十二病日痘瘡結痂ヲ始ムルト共ニ散漫狀ニ下降ヲ始メ、第十六病日平溫トナル。
- 二、發病當初腰痛烈シキコト。
- 三、第四病日發痘一齊ニ出ヅルコト。
- 四、痘瘡ハ圓形ナルコト及痘臍ヲ有スルコト。
- 五、發痘ハ末梢部ニ多ク、必ズ手掌、足蹠ニ存スルコト。
- 六、癢痕ヲ貽スコト。

〔各臟器ノ症狀並合併症〕

一、呼吸器

發病前ヨリ氣道ニ内疹ヲ生ズルコト既述ノ如シ、次ニ二次的ニハ喉頭ニ潰瘍ヲ生ジ、甚シキハ喉頭軟骨膜炎、聲門水腫ヲ來スコトアリ、其ノ他廣汎性氣管支炎、嚙下性肺炎、肋膜炎ヲ起スコトアリ。

二、消化器

内疹ハ口腔、咽頭、食道上部ニ現レ、稀ニ直腸ニ來ルコトアルモ、胃腸粘膜炎ニ來ルコトハ極メテ稀ナリ、便ハ多ク秘結スルモ、時ニ劇シキ下痢ヲ起シ、稀ニハ赤痢樣症狀ヲ見ルコトアリ。  
哺乳兒ハ鼻腔、咽頭、食道等ノ發疹、糜爛ノ爲ニ哺乳困難ヲ招キ、爲ニ死亡スルコト多シ。  
口腔、咽頭ノ發疹ニ次デ、化膿性中耳炎、耳下腺炎、チフテリア等ヲ惹起スルコトアリ、肝臟モ往々腫大シ、脾腫亦之ヲ認ムル場合多シ。

三、循環器